

令和 2 年 5 月 18 日現在

機関番号：17601

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2016～2019

課題番号：16K17479

研究課題名(和文) 自閉症児童の社会的スキルの般化・維持に対するセルフモニタリングの効果と変数の検討

研究課題名(英文) Effects and variables of self-monitoring on the generalization and maintenance of social skills in children with autism spectrum disorder

研究代表者

半田 健 (Handa, Ken)

宮崎大学・教育学部・講師

研究者番号：90756008

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,900,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、自閉スペクトラム症児童の社会的スキルの般化・維持に対するセルフモニタリングの効果と、その効果に影響を及ぼす変数を明らかにすることを目的とした。本研究の結果、セルフモニタリングが、社会的スキルを通常の学級に般化・維持させることが示唆された。また、セルフモニタリングの効果に記録間隔が影響を及ぼすことが示唆された。

研究成果の学術的意義や社会的意義

自閉スペクトラム症児を対象とした社会的スキルの指導に関する研究は、これまで数多く行われてきたが、指導効果の般化・維持をもたらす指導方法については十分な知見を得られていなかった。これに対し本研究は、通常の学級におけるセルフモニタリングが、通常の学級に社会的スキルを般化・維持させることを示唆した。また、セルフモニタリングの効果に記録間隔が影響を及ぼすことと、事前に記録間隔に関するアセスメントを行うことで対象児にとって効果的な手続きの条件を同定できることが示唆された。これらの知見は、インクルーシブ教育システム構築に向け、自閉スペクトラム症児が通常の学級で級友と友好な関係を築くための有益な知見になる。

研究成果の概要(英文)：This study aimed to determine the effects of self-monitoring on the generalization and maintenance of social skills in children with autism spectrum disorder and the variables that influence its effects. The results of this study suggest that self-monitoring leads to the generalization and maintenance of social skills in the regular classroom. It was also suggested that the recording interval had an effect on the effect of self-monitoring.

研究分野：特別支援教育

キーワード：自閉スペクトラム症 社会的スキル セルフモニタリング 通常の学級

## 様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

### 1. 研究開始当初の背景

自閉スペクトラム症(以下、ASD)児は、対人関係を円滑に運ぶためのスキルである社会的スキルに苦手さを抱えることがあり、学校場面で級友との友好的関係を築きにくいことが指摘されている。半田・野呂(2015)は、小学校の自閉症・情緒障害特別支援学級(以下、情緒学級)におけるソーシャルスキルトレーニング(以下、SST)について、情緒学級担任を対象にアンケート調査を行っている。その結果、多くの情緒学級担任は、情緒学級のSSTで指導した社会的スキルが通常の学級に般化・維持しないと感じていることを明らかにしている。ASD児の社会的スキルに関する般化・維持については、これまで多くの研究で同様の課題が指摘されている。

このような指導場面以外の場面における指導効果の般化・維持について、Machalicek, O'Reilly, Beretvas, Sigafoos, Lancioni, Sorrells, Lang, and Rispoli(2008)は、指導場面以外の場面において標的行動に対する強化随伴性を整備しなければ標的行動が消去されてしまい、般化や維持が生じないことを指摘している。これらのことから、情緒学級でのSSTで獲得されたスキルを般化・維持させるためには、日常生活におけるASD児のスキルの遂行に対し、手がかかりや強化随伴性の整備といった指導を組み込む必要があると考えられる。

一方、通常の学級で指導を実施する際には、学校業務で多忙を極める通常の学級担任が実施可能な指導方法を検討する必要がある。応用行動分析学に基づく指導方法の中で、時間や労力等のコストを低く抑えることができる指導方法にセルフモニタリングが挙げられる(Cooper, Heron, & Heward, 2007)。セルフモニタリングとは、子どもが自身の標的行動の生起を観察しその結果を自己記録する指導方法である。セルフモニタリングは、子どもがすでにレポーターとして有している行動の遂行に対し、注意を喚起して強化できることから(Reid, 1996)社会的スキル遂行に対する手がかかりや強化随伴性を整備できると考えられる。以上のことから、セルフモニタリングは、通常の学級担任にとって実施可能な指導方法であるとともに、情緒学級でのSSTによって得られた指導効果を通常の学級に般化・維持させることができると推測される。

そこで、研究代表者は、予備的研究として、ASD児童1名に対し情緒学級でSSTを行った後に、通常の学級でセルフモニタリングを実施することで、通常の学級における指導効果の般化を得られるか検討している。その結果、通常の学級における指導効果の般化が確認された。しかし、この予備的研究で得られた知見は、対象児が1名であったことから限定的であり、追試研究が必要であると考えられる。

さらに、通常の学級担任がセルフモニタリングを効果的かつ効率的に実施するためには、セルフモニタリングの効果に影響を及ぼす変数を明らかにする必要がある。変数の影響は、場面や障害種、年齢、標的行動によって異なると考えられるため、場面等を限定した上で実証的に知見を蓄積することが重要である。

### 2. 研究の目的

本研究は、小学校の通常の学級におけるASD児童の社会的スキルの般化・維持に対するセルフモニタリングの効果と、その効果に影響を及ぼす変数を明らかにすることを目的とする。

### 3. 研究の方法

#### (1) 研究1

##### 目的

研究1は、セルフモニタリングが、ASD児の社会的スキルを通常の学級に般化・維持させることができるか検討した。また、セルフモニタリングの効果に影響を及ぼす変数として記録間隔を取り上げ、その影響を検討した。

##### 対象児

対象児は、小学校の情緒学級に在籍する3年生の児童2名であった(以下、A児、B児)。A児は、ASDの診断があった。B児は、AD/HDの診断と情緒学級担任よりASDの疑いがあると指摘されていた。

##### 標的行動

標的行動は、情緒学級担任と通常の学級担任に対する聞き取りと行動観察から、通常の学級担任の話に対して頭を上げて話を聞く行動(以下、社会的スキル)と通常の学級担任の話に対して手遊びをする行動(以下、問題行動)を選定した。また、指導場面として、通常の学級担任の話を聞く時間が比較的長い社会と理科の授業を選定した。

##### 手続き

ベースライン:指導を開始する前に、情緒学級で対象児の社会的スキルに関する評価を行った。その結果、対象児は、社会的スキルに関する知識や技術をすでに獲得していることが確認された。そのため、本研究の対象児には、情緒学級におけるSSTが必要ないと考えられた。通常の学級担任には、通常通り、対応するよう依頼した。

記録間隔がセルフモニタリングの効果に及ぼす影響のアセスメント:セルフモニタリングの効果に影響を及ぼす変数として記録間隔を取り上げ、その影響をアセスメントした。本研究で用いたセルフモニタリングは、授業終了を知らせるチャイムもしくはタイマーを弁別刺激として対象児が標的行動の遂行に関してxを自己記録する手続きであった。アセスメントでは、記録間隔として45分条件と22分条件を用いた。45分条件は、45分間に1回自己記録を行う条件であり、自己記録の弁別刺激として授業終了を知らせるチャイムを用いた。22分条件は、22分間

に1回、つまり45分間に2回自己記録を行う条件であり、自己記録の弁別刺激として、1回目の記録はタイマーを用いて、2回目の記録は授業終了を知らせるチャイムを用いた。

アセスメントの結果、A児は、45分条件と22分条件において標的行動の生起率に明確な差がみられなかった。一方、B児は、社会的スキルの生起率において22分条件が45分条件よりも改善をもたらしたが、問題行動の生起率は条件間に差がみられなかった。以上より、A児には、45分条件を用いたセルフモニタリングを実施することとした。一方、B児には、22分条件を用いたセルフモニタリングを実施し、標的行動の改善に伴って45分条件を用いたセルフモニタリングを実施することとした。

セルフモニタリング：セルフモニタリングは、記録間隔がセルフモニタリングの効果に及ぼす影響のアセスメントの結果を踏まえ、対象児にそれぞれの条件で実施した。

プローブ：ベースライン同様、通常の学級担任には、通常通り、対応するよう依頼した。

#### 効果評価

通常の学級における標的行動の生起について、ベースライン期からプローブ期まで、10秒インターバルの瞬時タイムサンプリング法を用いて行動観察を行った。また、プローブ期において、通常の学級担任に対し、アセスメント手続きとセルフモニタリング手続きの受容性に関する質問紙を行った。

## (2) 研究2

### 目的

研究1を実施したところ、セルフモニタリングが、ASD児の社会的スキルを通常の学級に般化・維持させることが示唆された。しかし、セルフモニタリングは、個別的な指導であるため、通常の学級に指導対象となる児童が複数いた場合に適用が難しい可能性が考えられた。これに対し、先行研究の知見より、相互依存型集団随伴性が、学級の児童全体に対して、行動の手がかりや強化随伴性を整備できることが示唆された。相互依存型集団随伴性とは、学級などの集団単位での活動に当たり、集団全体に達すべき基準を設け、基準に達した場合に強化子を集団全体に随伴させる手続きを指す(若林, 2017)。以上より、研究2では、通常の学級において相互依存型集団随伴性を用いた指導が児童の行動に及ぼす効果を検討した。

### 対象児

対象児は、小学校の通常の学級に在籍する4年生の児童39名(男児17名、女児22名)であった。

### 標的行動

標的行動は、当初、社会的スキルを選定する予定であったが、通常の学級担任と特別支援教育コーディネーターに対する聞き取りと行動観察から、ニーズが高かった3時間目開始時のチャイムが鳴り終わるまでに児童が着席する行動とした。

### 手続き

ベースライン：通常の学級担任には、通常通り、対応するよう依頼した。

相互依存型集団随伴性を用いた指導：3時間目開始時のチャイムが鳴り終わるまでに着席していない児童が2名以下であった場合、通常の学級担任が学級全体にヤッターカード1枚を与えた。着席していない児童が3名以上であった場合は、担任教師が次回頑張るよう伝えた。

また、強化子の提示数を変動させる手続きを用いた。これはヤッターカードが与えられた際に、通常の学級担任がチャンスBOXからチャンスカードを引き、成功カードであればヤッターカードをさらにもう1枚追加し、失敗カードであればヤッターカードは追加しないというものであった。また、バックアップ強化子を児童に明示しない手続きも用いた。これはヤッターカードが所定枚数貯まれば、通常の学級担任がアイテムBOXからアイテムカードを引き、バックアップ強化子を決定するものであった。バックアップ強化子の内容は、児童から募り、その中から通常の学級担任と特別支援教育コーディネーターが選定した。そのため、児童はどのようなバックアップ強化子があるか知り得なかった。

バックアップ強化子を得るために必要なヤッターカードの所定枚数は、バックアップ強化子の取得状況に応じて4枚から8枚に徐々に増やした。また、チャンスBOX内に成功カードが入っている割合も、バックアップ強化子を得るために必要なヤッターカードの所定枚数が4枚と5枚の場合には10枚中7枚とし、それ以降は10枚中5枚とした。

### 効果評価

通常の学級における標的行動の生起について、ベースライン期から指導期まで、事象記録法を用いて行動観察を行った。

## 4. 研究成果

### (1) 研究1

#### 研究の主な結果

研究1は、セルフモニタリングが、ASD児の社会的スキルを通常の学級に般化・維持させることができるか検討した。また、セルフモニタリングの効果に影響を及ぼす変数として記録間隔を取り上げ、その影響を検討した。

記録間隔がセルフモニタリングの効果に及ぼす影響のアセスメントにおいて、対象児によって効果をもたらす記録間隔が異なることが明らかになった。そのアセスメント結果に基づき、通

常の学級でセルフモニタリングを実施したところ、セルフモニタリング期とプローブ期において、通常の学級の対象児の標的行動に改善がみられた。また、プローブ期に実施したアセスメント手続きとセルフモニタリング手続きに関する受容性についても、通常の学級担任より高く評価された。

得られた成果の国内外における位置づけとインパクト、今後の展望

ASD 児を対象とした社会的スキルの指導に関する研究は、これまで数多く行われてきたが、指導効果の般化・維持をもたらす指導方法については十分な知見を得られていなかった。これに対し、研究 1 は、セルフモニタリングが、通常の学級に社会的スキルを般化・維持させることを示唆した。また、セルフモニタリングの効果に記録間隔が影響を及ぼすことと、事前に記録間隔に関するアセスメントを行うことで対象児にとって効果的な手続きの条件を同定できることが示唆された。これらの知見は、我が国のインクルーシブ教育システム構築に向けて、自閉スペクトラム症児が通常の学級に在籍する級友と友好的な関係を築くために有益な知見になると考えられる。今後は、セルフモニタリングの効果に影響を及ぼす変数として、記録間隔以外の変数を取り上げることで、研究 1 の知見がより汎用的なものになると考えられる。

## (2) 研究 2

研究の主な結果

研究 2 は、通常の学級において相互依存型集団随伴性を用いた指導が児童の行動に及ぼす効果を検討した。通常の学級で相互依存型集団随伴性を用いた指導を実施したところ、指導期において対象児の標的行動に改善がみられた。

得られた成果の国内外における位置づけとインパクト、今後の展望

先行研究の知見より、相互依存型集団随伴性によって、学級の児童全体の行動の手がかりや強化随伴性を整備できることが示唆された。これに対し、研究 2 は、通常の学級で相互依存型集団随伴性を用いた指導が、対象児の着席行動に効果があることを示した。しかし、研究 2 では、標的行動が社会的スキルでなかったことから、相互依存型集団随伴性が、学級の児童全体の社会的スキルの手がかりや強化随伴性を整備できるか定かでない。今後は、セルフモニタリングの適用が難しい場合の代替案として相互依存型集団随伴性が適応可能であるか確認するために、社会的スキルを標的として相互依存型集団随伴性の有効性を検証することが必要であるだろう。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計3件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 半田 健・西田晴香
2. 発表標題 通常の学級において相互依存型集団随伴性にMysteryMotivatorを組み合わせた支援が着席行動に及ぼす効果
3. 学会等名 日本特殊教育学会第56回大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 半田 健・野呂文行
2. 発表標題 通常の学級における自閉症スペクトラム児童を対象とした記録間隔に関するアセスメントに基づいたセルフモニタリング
3. 学会等名 日本行動分析学会第35回大会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 半田 健
2. 発表標題 通常の学級における自閉症スペクトラム児童の教師の話を聞くスキルを対象としたセルフモニタリングの効果
3. 学会等名 日本LD学会第25回大会
4. 発表年 2016年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----